

未来の利益いまどう代弁？

ポイント

- 。「フューチャー・デザイン」の研究が急拡大
- 。実験では現在と将来の世代で考え方に差
- 。将来世代のための新制度創設には課題も

が、2組は通常の現在世代グループ、残り2組は「60年の将来世代」の立場になりきる役割を与えられた。

実験の結果、現在世代グループが現在の制約や課題の延長でビジョンを描いたのに対し、将来世代グループは地域の長所を伸ばすためにあえて困難な課題解決を目指すなど、考え方や合意内容に明らかに違いが表れたという。半年後のインタビューで、将来世代グループは「現在世代の自己と将来世代の自己を俯瞰（ふかん）し調停する思考が

エコノミクス トレンド

小林慶一郎
慶大教授

う。そのための具体的な制度改革として、将来世代を代表する機関（中央官庁の将来自治体での将来課など）の創設を検討する研究者もいる。

ワークショップでは、矢町をほはじめ、長野県松本市、高知県、北海道大沼町などにおける様々な住民討議の社会実験の結果が報告された。いずれにおいても、将来世代の役割を与えられた参加者がいると、討議の結果に変化があらることが確認された。

「仮想将来世代」学際で研究

「仮想将来世代」といって、そのように思考することに「喜び」を感じる、と答えたという。西條教授はこのような人格

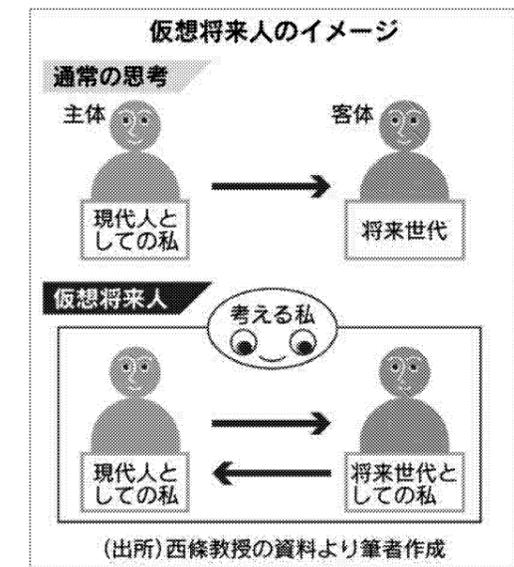
興味深いのは、将来世代の役割を与えられた実験参加者の心理や情動に大きな変化があった、という印象を研究者たちが受けたことである。これは、実験参加者の脳内の活動に何らかの変化が起きている可能性を示唆している。これを把握して、fMRI（機能的磁気共鳴画像装置）による解析で住民討議の場における脳内の変化を計測する研究計画のアイデアも出た。

研究の方向として、筆者は3つの課題を挙げておきたい。

1つ目は、「仮想将来世代（将来省のような公的組織）はどのように機能するか？」。仮想将来世代の組織を作ったときに、それが真に将来世代の利益を代表して現在世代の政策過程をチェックする、なせ言えるのか。

2つ目の課題は、「仮想将来世代の創設（将来省などの新制度の創設）の政治哲学的正当性はどこにあるか？」。将来世代のための新制度を創設するには、そのような改革が現在の民主政のシステムの中でも正当性を持つと言えなければならぬ。

3つ目の課題は、「ふつうの人々が自然に仮想将来人になるにはどうしたらよいか？」。つまり人々が将来世代一般への利他性（「愛」）を高めるにはどうしたらよいかということであり、これはサイエンスを超えた政治思想の問題かもしれない。



その他、東京大学の亀田達也教授のグループは、子や孫を持つ者が、将来世代の利益への関心が強まる傾向があるという心理学的な実験結果を報告した。早稲田大学の

実験で将来世代の役割を与えられた参加者が仮想将来人になれたという報告が一般的に成り立つならば、将来省のような組織はうまくワークするかもしれない。将来省の職員は「将来世代を代理する」

米哲学者ジョン・ロールズの「無知のヴェール」を使った社会契約論（「正義論」）の援用で、政治哲学的に正当化できるかもしれない。自分がどの世代に生まれるかわからない状態（無知のヴェールで覆われた状態）で人々が社会契約に同意するならば、人は最も不幸な世代（財政破綻などの被害を受ける世代）に生まれることを恐れるので、そうした世代の負担を減らすための仮想将来世代の創設に賛成するはずである。

フューチャー・デザインは社会科学だけでなく、神経科学や政治思想まで、幅広い領域で人間の知の在り方に革新をもたらす可能性がある。新たな枠組みで多様な研究が進展することが期待される。

4人の筆者が交代で執筆、原則、月1回掲載します。

フューチャー・デザインのひとつの目標は「現時点の政治的意思決定の場に、将来世代の利益を代表するアクター（演者）を現出させること」である。原圭史郎・大阪大准教授と西條教授の17年の論文で紹介された実験にその考え

方が典型的に表れている。15年、岩手県矢巾町でフューチャー・デザインの研究グループの協力の下、60年までの長期ビジョンを作成することになった。一般市民5、6人のグループ4組で議論して政策案を作るようになった

地球環境問題、人口減少、政府債務の膨張など、世代を超えた持続性に関する政策課題を解決し、将来世代に持続可能な自然環境と人間社会を引き継いでいくために、どのような社会制度をデザインすべきか。この問いを追求するのが、「フューチャー・デザイン」という研究のムーブメントである。

西條辰義・高知工科大学フューチャー・デザイン研究所長が提唱するこの動きは、2012年に大阪大学の研究者たちを中心を開始され、現在は経済学、心理学、倫理学、神経科学などの研究者を巻き込み、学際的な広がりを見せている。今年1月27、28日には、総合地球環境学研究所において第1回「フューチャー・デザイン・ワークショップ」が開催された。

現在が過去の歴史とつながっているときに初めて「この世界を次世代に引き継ぐためにどのような責任でも引き受けたい」という将来への愛が生まれる。世界への愛は、個人の愛と同じように、理屈ではなく歴史によって与えられる信念である。我々の課題は、過去から未来に向けた歴史の再生であり、歴史を通じて引き継がれるべき「公的なもの」を再発見することというべきかもしれない。

フューチャー・デザインは社会科学だけでなく、神経科学や政治思想まで、幅広い領域で人間の知の在り方に革新をもたらす可能性がある。新たな枠組みで多様な研究が進展することが期待される。

4人の筆者が交代で執筆、原則、月1回掲載します。